東ドイツにおける“アンネ・フランク”の理解と受容
―西ドイツとの比較からその社会的機能を考える―

田　中　　直

はじめに

アンネ・フランクと聞いて、その名前と彼女の日記の存在を知らない人はおそらくいないだろう。世界で最も有名なホロコースト犠牲者の一人にして、全世界で70以上もの言語[1]に訳され、2000万部を超える売り上げを誇る大ベストセラー『アンネの日記』の原作者である。日本においてもこの日記は1952年（昭和27年）に英語版からの翻訳本が『光ほのかに―アンネの日記』として出版[2]され、現在に至るまで表題や出版社を変えながら、累計発行部数600万部を記録[3]し、世代を超えて広く愛読されている。また、アンネを題材とした青少年向けの伝記や啓発本などもさまざまな形で多数出版[4]されており、直接、彼女の日記自体を読んだことがなかったとしても、誰しもが彼女の生涯を通して、戦争やユダヤ人の迫害、そしてホロコーストを学ぶという経験を一度はしているのではないだろうか。

そんな『アンネの日記』の成立と出版、そして世界的な広がりに関しての研究はオランダ国立戦時資料研究所発行の『アンネの日記　研究版』（1994年）[5]を始め、本当に数多く存在している。そして特に、西ドイツにおけるこの物語の受容については高橋秀寿の「アンネ・フランクの笑顔―50年代以降におけるホロコーストの表象」（2008年）[6]や『ホロコーストと戦後ドイツ』（2017年）[7]において詳しく論じられている。高橋は、この日記がドイツ語で初めて出版された1950年代前半の西ドイツの政治、社会状況に関して、「ホロコーストの体験と証言が世界史的な価値をもつ現在とは異なっており、“ホロコーストの犠牲者であるアンネ”の日記は、それゆえに受け入れられなかったこと」に言及している。すなわち、戦後まもなくは、解放者である「アメリカ」、加害者である「西ドイツ（第三帝国の後継国家）」、そして犠牲者である「ユダヤ人」のいずれも、ホロコーストを自分たちの物語に組み入れる意義を見出してはいなかったというのである[8]。しかし、それが、「1950年代後半から“ホロコーストの犠牲者の日記であるにもかかわらず”、これらの国で受け入れられるようになっていくのはなぜなのか」という問いを立て、その変化を論じている。

1）Isabel Thomas, Little Guides to ANNE FRANK, Laurence King Publishing, 2019, p.58.
2）文芸春秋から皆藤幸蔵による翻訳で出版。『光ほのかに―アンネの日記』のタイトルであった。
3）これはアメリカに次いで世界で二番目に多い発行部数である（2015年）。
4）例えば、学習漫画世界の伝記『アンネフランク　平和を願う人の心に生きつづける少女』、集英社、1992年／コミック版世界の伝記『アンネ・フランク』ポプラ社、2011年／アンネ・フランク・ハウス編『アンネのこと、すべて』ポプラ社、2018年／スティーブン・クレンスキー著、新しい世界の伝記『アンネ・フランク』三省堂、2020年など、枚挙にいとまがないが、このように青少年向けの書籍が多数出版されている。
5）オランダ国立戦時資料研究所編『アンネの日記　研究版』深町眞理子訳、文芸春秋、1994年。
6）高橋秀寿「アンネ・フランクの笑顔―50年代以降におけるホロコーストの表象」『立命館史学』29号、2008年。
7）高橋秀寿『ホロコーストと戦後ドイツ―表象・物語・主体』岩波書店、2017年。
8）同上、37頁。

詳細は後の章にゆずるが、ドイツにおいて、『アンネの日記』は、1956年にアメリカから「演劇」としてやってくることで、その人気に火がついた。西ベルリン、ドレスデン、デュッセルドルフ、ハンブルク、カールスルーエ、コンスタンツ。この6都市においての同時公演（10月1日）は大成功をおさめ、その後、さまざまな反響をよんでいくことになった。特に、東ドイツにおいて『アンネの日記』はこの時期、まだ書籍で出版されてはおらず、この劇の上演をもって正式に紹介された。そして、この劇の成功とともに初版（計）35,000部が当局の許可を受け、翌年の秋に出版されたのであった[9)]。

冷戦下のドイツにあって、アメリカ人作家の劇が東ドイツでも同時上演されることへの違和感。しかも、高橋に倣って言うならば、“レジスタンスでもなければ、共産主義者でもない一人の「ユダヤ人少女」[10)]の物語”が東ドイツで許可され、出版され、人気を博すという状況に関して何かしらの考察を加えねばなるまい。そして、アンネやその日記が東ドイツにおいてどのように理解され、受容されたのか、について考察し、それが「西ドイツ」のアンネの理解や受容といかに異なる形で社会的に機能したのかを1970年までを中心に明らかにしたい。

第一章：『アンネの日記』の登場と受容　～アメリカから西ドイツへ～

まず初めに、『アンネの日記』の出版と世界的な広がりについて簡単にまとめておきたい。

この日記は、1942年6月12日、アンネ13歳の誕生日に始まり、1944年8月1日（ドイツ保安警察がアンネを逮捕する3日前）までの主に「隠れ家」での日常を書き留めたものである。アンネたち[11)]が収容所へと連れ去られたのち、日記は、彼女たちを匿う手助けをしていたミープ・ヒースによって収集、保管されていた。アウシュビッツを生き抜いた父、オットー・フランクが45年にオランダへと帰還すると、日記は彼に手渡された。そして生前のアンネの願いをかなえるべく、彼はその出版に奔走する。いくつもの出版社に断られる中、この原稿を読んだ著名なオランダの歴史家、ヤン・ロイメンが日記についての論考を執筆した。これが新聞『ヘト・パロール』の一面に掲載されたことをきっかけとして、1947年の夏、オランダでアンネ・フランク著『隠れ家―1942年6月12日から1944年8月1日までの書簡体による日記』がコンタクト社から出版された[12)]。いくつかの修正と編集を加えられた日記の初版は約3,000部であったが[13)]、書評家たちからは全員一致で好意的な批評を得たという[14)]。少女の知的な成長と表現の豊かさといった人物や文学的評価だけでなく、この物語を通じての教育的価値も見出されている。そして、この日記は1950年までにオラン

9）Sylke Kirschnick, *Anne Frank und die DDR Politische Deutungen und persönliche Lesarten des Berühmten Tagebuchs*, Ch.Links Verlag, 2009, S.69-70.

10）本稿での「ユダヤ人」とは、ニュルンベルク法で規定された「ユダヤ人」範疇の人々を指す。

11）アンネの家族4人、ファン・ペルス一家が3人、そしてフリッツ・プフェファーの合計8人である。この中で無事生還できたのは、アンネの父、オットーフランクだけであった。

12）アンネ・フランク・ハウス編『アンネのこと、すべて』ポプラ社、2018年、36-37頁。

13）同上、37頁。ちなみに『アンネの日記 研究版』78頁によると、初版は1500部となっているが、こちらはヤン・フレイマンの映画の中に出てくるド・ネーヴの証言から引用されている。よって、ここではアンネ・フランク・ハウスが編集したより新しい文献より、約3000部という数字をとることとした。

14）同上、78頁。

ダで6刷りを重ねるが、その後の再版は55年となる。

1950年にはドイツ語版が“Das Tagebuch der Anne Frank（アンネの日記）”としてハイデルベルクのランベルト・シュナイダー社から4,500部で出版、同年フランス語版も“Journal de Anne Frank（アンネの日記）”の題でカルマン・レヴィー社から刊行されるも、数千部にとどまった。英語版も同時期に構想されてはいたが、アメリカでは、すでに8社に出版を断られ、書籍化は難航していた。高橋が指摘するように、この時期、「解放者、加害者、犠牲者のいずれもホロコーストを国民の物語に組み入れる意義を見出しえなかった」が故に、どこの国でもなかなか受け入れられなかったのである[15)]。

しかし、この状況は、ようやくこぎつけたアメリカでの出版（52年）と戯曲化（55年）、それに続く映画化（59年）によって徐々に変化を見せる。52年6月、ダブルデイ社から“The Diary of Young Girl”としてアンネの日記は出版された[16)]。ジャーナリストで作家でもあるユダヤ系アメリカ人、マイヤー・レヴィンは『ニューヨークタイムズ・ブックレヴュー』でこの本を取り上げ、賛辞を贈った[17)]。そして読者に、「これはゲットーの陰鬱な物語でもなければ、ぞっとするような恐怖の物語集でもない」と安心感を与え[18)]、「この人たちは隣に住んでいるかもしれない。彼らの感情や緊張感、満足感はどこにいても人間の性格や成長にかかわるものだ。」や「この賢くて素晴らしい少女は人間の中にある、無限の大いなる喜びを蘇らせてくれる」など、身近にいる快活な少女の日常の物語であることを強調したのである[19)]。この記事の影響は非常に大きく、それから一週間以内に『アンネの日記』は45,000部が印刷され、販売されたのであった[20)]。

そして翌年、この日記の戯曲化の脚本制作がアルバート・ハケット、フランシス・グッドリッチ夫妻に依頼され、舞台上演されることになった。フィラデルフィアでの2週間の試演の後、1955年10月5日、ニューヨーク・ブロードウェイで初演が幕を開けた。この芝居は見事、興行的に大成功をおさめ、夫妻はピューリッツァー賞、トニー賞最優秀戯曲賞、そしてニューヨーク演劇批評家サークル賞を受賞するなど、その反響は大きく、評価は高かった[21)]。そしてこの作品は1956年8月末にはヨーロッパに持ち込まれ、スウェーデンのイェーテボリで初上演された。その後、10月1日からは東西ドイツの6都市で、そして11月27日にはオランダで初演を迎えることとなった[22)]。当初、各地の反応としては、幕が下りても拍手一つない静寂が続くときもあれば、それとは逆に満場の拍手が鳴り止まず、いつまでも劇場を包み込む場合があるなど、さまざまであったといわれている。ただ、50年代末だけでも各地で数十万人の観客動員を果たし、この演劇のチケットはどこでも早々に売り切れとなったのは事実である[23)]。

15）高橋（2017）、36-37頁。
16）1952年イギリスでもヴァレンタイン・ミッチェル＆カンパニー社より出版。
17）Mayer Levin “The Girl behind the Secret Door” in: *New York Times Book Review*, 15 June1952, p.1.
18）Gulie Ne'eman Arad “Der Holocaust in der amerikanisierten Erinnerung”, Gertrud Koch (Hg.), *Bruchlinien:Tendenzen der Holocaustforschung*, Böhlau Verlag, 1999, S.233.
19）Peter Novick, *The Holocaust in American Life*, Mariner Book, 1999, p.118.
20）Arad (1999), S.234.
21）Novick (1999), p.117.
22）『アンネの日記研究版』（1994）、86頁。
23）同上。

これを期に西ドイツではフィッシャー社からペーパーバック版が出版された。これはその後の5年間で18回の増刷を重ね、計70万部を売り上げた[24]。オランダでも57年には9回の増刷があり、同年にはアムステルダム市プリンセンフラハト263番地の「アンネの隠れ家」が保存されることが決定され、同時にアンネ・フランク財団も設立された[25]。そして、1959年にはハリウッドで『アンネの日記』が映画化[26]され、こちらもアメリカでの封切と同時に、何百万人もの人が劇場に足を運ぶこととなった。60年には西ドイツでもこの映画は公開され、その年だけで約400万人が鑑賞したと言われている[27]。そしてこの後、アンネの影響は各方面へと広がっていった。例えば、西ドイツ各地の学校名がアンネにちなんだものに変更されたり、アンネが命を落としたベルゲン・ベルゼン強制収容所やアンネ・フランク・ハウスへの学習旅行が企画、実行されたり[28]、はたまた79年にはアンネ生誕50周年を記念して、アンネの顔を全面に使用した切手の発売も行われている。

このようにアメリカや西ドイツで人々に受けいれられたのはなぜなのか。それは、もちろん彼女の文才、構成と表現力によるところは言うまでもないが、アメリカで、出版や、戯曲化、そして映画化されていく演出の過程で、①ユダヤ色が薄められ、ユダヤ人犠牲者の物語を人類一般の運命への問題へと「普遍化」したこと　②人間に対する信頼と希望のメッセージを伝える物語へ転換され、逮捕された後の「暗くて、恐怖にあふれる収容所」の持つ「死」のイメージを想像させなかったこと　③直接的なドイツ人への批判の文面箇所を和らげて編集したこと　④この時代にまだタブーであった性的な話題や生理についての内容を編集で削除したこと、などがその理由としてあげられる。これを高橋やNovickは（特に①～③の理由を）「“アメリカナイズされた”アンネとその物語の解釈や記憶」と呼ぶが[29]、この効果は絶大であり、幅広い人々がこの物語を受け入れた要因として理解することができる。

そして高橋曰く、西ドイツにおいては、この「誰の過ちか」を不問にされ「普遍化」されたアンネの物語は、自らの「犠牲者共同体」としての「国民的記憶」と同一化することを可能としたのであった。これはホロコーストの過去を罪意識なく解釈することができたし、また、「それでも人間の中の善」を信じるアンネの「微笑み」は、旧ナチ党員だった人々や、ナチズムに同調・共感していた人々にとっての赦しの「笑顔」であったと理解することができる。このように「同一化」され、「青春ドラマ」として「普遍化」されたアンネの物語は、「人間に対する信頼と希望のメッセージを伝える物語」として意味が付与され、西ドイツで受容されていくのである。

24）高橋（2017）、42頁。
25）アンネ・フランク・ハウスは1960年5月3日開館。
26）監督はジョージ・スティーブス。現在、ワシントンのホロコーストミュージアムで継続的に上演されているダッハウ解放の映画も制作している。
27）高橋（2017）、42頁。
28）高橋（2017）、42頁。
29）Arad (1999), p.231. 高橋（2017）、44-47頁。
アメリカナイズされる過程についてはNovick (1999), pp.117-120. / Arad (1999), S.233-237.

第二章：東ドイツにおける『アンネの日記』の出版とその社会的背景

前章でみたように、『アンネの日記』はアメリカで戯曲の脚本となった後、舞台作品として東西ドイツにやってきた。特に東ドイツにおいては、56年の演劇での公開以前には書籍として出版されてはおらず、名実ともに初公開であった。それでは、なぜ、東ドイツではこの日記の紹介、出版が50年代後半になるまでされなかったのだろうか。

そこには2つの原因が考えられている。1つ目は、アンネの父、オットーが東ドイツやポーランドなど、ソ連の影響下にある地域での日記の発行には消極的であった点である。それは、この地域では戦争が終結しても、1950年に至るまで、旧ナチスの収容所がそのまま、ソ連管理下の収容所として使用され続けていたからである。連行と収容という過酷な体験の記憶を持つオットーにとって、それは耐えられないものであった。

また、2つ目として、西ドイツやアメリカで初版が出されたちょうどその頃、東ドイツを含め、ソ連圏では“反ユダヤ主義”が吹き荒れており、ユダヤ人を見る目が厳しかったことがあげられる。ことの始まりは、戦後西側諸国から帰国してきた亡命ユダヤ人たちへのスターリンの不信感の蓄積である。それが1951年に行われたチェコスロヴァキアのユダヤ系共産党書記長ルドルフ・スランスキーの粛清とその後の裁判と処刑（52年12月）やユダヤ人医師たちがソ連の政治家や将軍を暗殺したとされた53年の医師団陰謀事件となり、ソ連主導の下で「反ユダヤ主義キャンペーン」が盛り上がりを見せた。これによって多くのユダヤ系市民が各地で粛清されたのである。これ幸いにも53年3月5日にスターリンが病死したことで、ユダヤ系住民にとって最悪の事態は避けられたが、この動きは東ドイツにも大きな影を落とした。実際、東ドイツにおいて反ユダヤ主義キャンペーンが展開されたのは、他の東欧諸国と比べてはるかに遅く、52年12月以降であったが、短期間にもかかわらず、国内相当数のユダヤ人が尋問や検査にかけられた上に監視され、役職も解任された。SEDが「シオニズムや国際的なユダヤ人組織が東ドイツにおいてもスパイとサボタージュを煽るのに、ファシズムの犠牲者であるという同情を活用している」との通達を発し、国内向け機関紙において反ユダヤ主義的記事を多数掲載したのである。この当時、東ドイツに住んでいたユダヤ人は2,300人とみられるが、このような社会状況下でそのうちの4分の1にあたる約550人（主にゲマインデの指導者たち）が西側世界へと移住したのであった。

この2つの事情によって、アンネの日記の東欧への紹介は遅れることとなった。もちろん、ベルリンの壁建設以前は西側で出版された書籍が東ドイツに流れ込んでいたということは十分に考えられる。しかし、西ドイツでの発行部数を考えると、アンネは、56年まで、東ドイツではあまり知られた存在ではなかったといえよう。

しかし、1956年に演劇としてやってきた『アンネの日記』は東ドイツにおいても理解され、当局の許可を得て書籍が発行され、短期間の内に受容されていくことになる。ここでは、この本が東ドイツにおいて出版される過程について記しておきたい。

『アンネの日記』はそもそも東ドイツで反ユダヤ主義キャンペーンが始まる直前の1952年に出版が模索されていた。オットーの知り合いであったユダヤ人歌手、リン・ジャルダティ（彼女と友人がアンネとアンネの姉マルゴットの死をオットーに伝えた）の夫、エバーハルト・レブリングが東ドイツで出版社を探し、ヘンシェル社を紹介したとの記録が残っている。しかし、この時は、アンネがレジ

スタンスの闘士でなかったとして、却下されている。もちろん、ソ連主導で開始されているユダヤ人への敵視政策の影響もあったであろうが、東ドイツの建国時の国是においては「ナチスと戦ったか否か」が重要視されており、この意味で東ドイツにおいても受容される余地がこの時期には見られなかった。しかし、55 年のブロードウェイでの成功と、その後の 56 年 10 月のヨーロッパでの同時初演上演の人気ぶりに東ドイツ版の出版が再考された。西ドイツ版の東への転用ではなく、東ドイツ版の新たなものを作り（前書きなども東ドイツの著名人のものを使用）、幅広い層が購入できる価格で発売されること、というのがオットーの意向であった。ここで選定されたのが、ユニオン社（Union Verlag）であった。ここは他の国営出版社とは異なり、東ドイツキリスト教民主同盟の傘下にあった。そしてプロテスタント系出版社 4 社の統括会社でもあり、主に宗教書や文芸、哲学、文化史などを扱う出版社であった。東ドイツにおいてこの時期、教会は比較的自由に活動できており、その枠組みの中で話が進められていった。またこの出版社の書籍のターゲットは社会の中・上流層であり、ここへの作品の浸透は大きな社会的意味を持った。当初、10,000 部のハードカバー版を出版するということで目標が定められ、準備が整えられた[30]。

実は、東ドイツでは出版の自由は憲法で保障され、検閲も禁止されていた。それにも関わらず、それを自由に行うことは困難であり、厳格に管理されていた。書籍出版に際しては「印刷許可」という公的な認可を、各出版社が行政機関から得なければならなかった[31]。1951 年からは「文化出版局」がこれを担当し、56 年には文部省（1954 年設立）へと編入された。その後、この部門は「出版管理主局」及び「純文学管理主局」部門と統合され、「文学書籍部局」となっている。そして、ここが出す許可をもって、印刷用の紙も配分されるといった具合であった。この許可申請のためには、事前に出版社がその書籍がいかに重要かを記した専門家の意見書をつけたり、見積もりを出したり、そして内容の自己検閲なども行われていた[32]。

1956 年 11 月 15 日、この提出書類が揃えられた。本の納期は 1957 年 3 月、全 10,000 部、費用は 7,000 マルク、必要な紙は 2,504 トンとのことであった[33]。12 月 3 日、この印刷許可申請書には当時の出版部長カール・ワグナーの署名が入り、専門家の意見書と、ハイデルベルク版の日記のコピーとともに、文化出版局に送られた。そして数日後「Genehmight（許可）」というスタンプの押印を受けたのであった。しかし、この計画はその通りに遂行されなかった。演劇の人気とともに出版部数が最初 20,000 部、そしてその後 5,000 部の追加増刷決定となり納期が遅れることとなったのである。出版社がそのたびに当局へと申請を出し直し、「許可」されている。この増刷のために出版社は、この年に計画されていた他の二冊の書籍の発行を翌年に遅らせて、用紙を確保したほどであった。この間に、目の不自由な人のためのテープ音声図書がライプニッツ盲人図書館でお披露目されている。これは 56 年 12 月にオットー・フランクの合意のもと、テープ作成が許可されてい

30）Kirschnick (2009), “Das »Erscheinen eines ungewöhnlichen Buches« Das DDR-Lizenzausgabe und die ersten Wortmeldungen von Propst Heinrich Grüber und Arnold Zweig”, S.66.

31）伊豆田俊輔「東ドイツにおける出版・検閲制度と「公論」―1950 年代のアウフバウ出版社の事例から―」『西洋史研究』第 47 号、2018 年、6-7 頁。

32）伊豆田（2018）、8 頁、21 頁。

33）Kirschnick (2019), S.69. S.71.

たものであり、ライセンス料は免除となっていた[34]（なので、東ドイツ版のアンネの日記はこれが最初ということになる）。遅れていた書籍発売であったが、57年の秋についに東ドイツの書店に並ぶこととなった。値段は一冊7マルクであった。1957年から90年の間に、『アンネの日記』は東ドイツにおいて、全8版が出版されている。そのうち6版がユニオン社からであり、版はそれぞれ5,000部から40,000部と偏りはあるものの最初の4版目までが1961年までに発売され、ハードカバー版2版とペーパーバック版の2版、計4版で、121,000部の発売であった[35]。1972年に予定されていた復刻版の第5版は、紙の調達困難のために1980年まで印刷されなかった。そして最後のものはドイツ統一の年、90年に出版されている。ちなみに他の2版は児童出版社（Kinder Verlag）から1986年と89年に出されている。この他にも注釈付きの日記の抜粋は1957年に出された少女向けの年鑑『Zaubertruhe』（児童出版社）のように何度も出版されているし、1968年から84年にかけて出版された第7学年用の学校読本にも、短い抜粋3編が収録されていた。そして『ベルリン新聞』（57年）や『ユンゲ・ヴェルト』紙（86年）などもこの日記の連載を行なっており[36]、非常に広範な読者を得て、受容されている様子を見てとることができる。

演劇の方も非常に好調であり、例えば1957年のデッサウ州立劇場でのハヌカフェスティバル1957/58では、24回の公演に合計25,169人の来場者があった[37]。公演を重ねるうちに、徐々に、西ドイツと比べての違いも出現してきた。プログラムの小冊子や教育観覧の付属資料などが、当局の支援のもと独自に拡充されたのである。ここでは、西ドイツに逃れている元ナチス高官の告発やユダヤ人の大量虐殺に関する情報が盛り込まれて、青少年に配布されたのであった。

この時期のアンネの日記をめぐる評価として、専門家の意見書を挙げておきたい。以下は西側で制作されたアンネの生涯に渡る物語（収容所の中の様子から亡くなるまでを含む）を東ドイツで出版しようとしたときの1958年に付けられた専門家の意見書である。結局この本は、当局からの許可が出なかったが[38]、そこには、アンネ関連の書籍を東ドイツで出版する意義がまとめられている[39]。

①本書の知識は、西ドイツにおける再軍備化とネオ・ファシズムから発せられる危険で有害な傾向との闘いにおいて、ドイツ民主勢力の重要な援助となりうるものである。

②このような出版物によって、我々はファシズムのすべての犠牲者の記憶を尊重し、この出来事の大きな道徳的意義を人々の心にとどめ、若者たちに伝えることに貢献する。

③ドイツ民主共和国でも『アンネの日記』を感動的に読んだ何千人もの読者は、この貴重で価値ある次の書籍を歓迎することだろう。

34）同上 , S.72.

35）同上。

36）同上。

37）Kirschnick (2009), “Ein »Dokument der Menschlichkeit« Das Tagebuch der Anne Frank auf den Bühnen der DDR zwischen 1956 und 1989”, S.50.

38）今回、この不許可の理由は分からなかったが、東ドイツ当局からすれば、ブルジョワ市民階級であったアンネの隠れ家以前の生活や、闘争もせずに殺されていくだけの収容所での生活を描く物語は、この時期には理解されていなかったとも考えられる。もしくは、紙の供給などに問題があったのかもしれないが、これに関しては要調査が必要である。

39）Kirschnick (2009) “Das »Erscheinen eines ungewöhnlichen Buches« Das DDR-Lizenzausgabe und die ersten Wortmeldungen von Propst Heinrich Grüber und Arnold Zweig”, S.73-74.

このように東ドイツでもこの「アンネの物語」は自らの国是と、そして東西ドイツの対立において、西側とは異なる理由で“価値あるもの”として評価されている。また、この意見書の中で『アンネの日記』が東ドイツにおいて、いかに感動的に多くの人々に読まれていたかも確認することができる。そして、この後、60年代になると東ドイツでも学校や教育施設にアンネの名前が冠されたり、61年には西ドイツよりも先んじてアンネの写真を全面に使用した切手も発売されたりしている。このように東ドイツにおいて、アンネの物語、そしてアンネ自身も人々に受け入れられると同時に国家の後ろ盾も得ている様子が見てとれるよう。これを踏まえて、次の章では、どうして、このようなことが東ドイツで可能となったのか、東ドイツ社会のどこに、この物語を受け入れる素地があったのか、について社会的な背景の一端を考察することとする。

第三章：東ドイツにおける“アンネ・フランク”の受容の素地について

東ドイツにおける「過去の克服」の「不十分さ」なるものが西ドイツのそれと比べられて書かれることは、90年以降の統一ドイツにおいて珍しいことではない。「戦後、真摯にナチスの過去を受け入れ、反省し続けてきた良い国」である西ドイツに対して、「独裁政治の下で監視や統制が敷かれ、過去に対しても無関心だった悪き国」東ドイツがイメージとして対峙しているのは今も否定できない事実である。しかし、戦後間も無い頃のソ連占領地域や、東ドイツ建国直後、1970年までの東ドイツには、西ドイツよりも強力に、反ナチズムの観点から、ユダヤ人の迫害に関するテーマが扱われていた。これに関しては、例えば、1992から連邦議会付の“ドイツ社会主義統一党独裁歴史検証委員会”委員長を務めるペーター・マァザが詳しい。マァザは、1995年に出した「東ドイツの国内政治におけるユダヤ人とユダヤ人協会」[40]の中で東ドイツ時代のホロコーストの扱いに触れ、「ユダヤ民族に対する大量虐殺の記憶は当初からソビエト占領地域、及び東ドイツにおいては高い地位を持っていた」と明記している。それでは、一体どのように彼らの記憶は扱われていたのであろうか。本章では、『アンネの日記』が東ドイツで普及していく70年代までの様子を捉え、この物語とアンネの受容の素地を探ることとする。

ｉ）敗戦から1950年まで

1949年にドイツ民主共和国となるソ連占領地域には、戦後まもなくナチスから解放されたレジスタンス運動を繰り広げていた人々、地下潜伏活動をしていた人々、そして他国へ亡命していた知識人たちが次々と帰国した。彼らの多くはもともと資本主義や帝国主義、そしてなによりもナチズムとは異なる思想を持った人々であり（だからこそナチス政権から迫害されていた）、彼らが社会主義国家であるソ連の占領地区に戻ってくることは必然であった。社会主義国家建設への希望は当時、今日では想像もつかないほど大きなものであり、アクチュアルなものであったという[41]。

40）Peter Maser “Juden und Jüdische Gemeinden in der Innenpolitik der DDR” Werner Bergmann, Rainer Erb (Hg.), *Schwieriges Erbe Der Umgang mit Nationalsozialismus und Antisemitismus in Österreich, der DDR und der Bundesrepublik Deutschland*, Campus Verlag, 1995.

41）三島憲一編訳、『戦後ドイツを生きて　知識人は語る』、岩波書店、1994年。

そんな彼らがまず始めにしたこと、それはナチスによって殺された仲間たちの追悼の場をさまざまな場所に設置することであった。1945年9月15日にはベルリンのアードラースホーフ駅前広場に犠牲者ネームプレートが設置され、「ファシズムの犠牲者のために」と碑銘が冠せられた。またその翌日には東地区最大のユダヤ人墓地であるベルリン、ヴァンセンゼー墓地にナチズム体制下のユダヤ人犠牲者のための記念碑が建設されている[42]。そのほかにも各地に個人や小さな諸団体によって「犠牲者を追悼し、二度とファシズムを許すな」という目的を掲げた記念碑が立ち並んだのであった。46年の春にはファシズム犠牲者委員会が国際的に記念すべき場所の懸賞募集[43]を行ったり、行政においてもソ連地区ドイツ司法行政長官シッファーによる「ベルリン・プレンゼー処刑場慰霊碑建設計画」が提案されたりと、官民問わず積極的にナチス被害者の顕彰行為が話題となっていた。

また「被迫害者団体連盟」は、ドイツ人によって構成されていた政治組織であったが、ユダヤ人の被迫害についても取り扱い、ユダヤ人ホロコースト犠牲者を追悼しようというきっかけを東ドイツ地区に作った。残念ながら東独市民の広範な参加には至らなかったが、実際この団体によって45年11月12日には38年11月に起きたポグロムの7周年を偲ぶ会がマズーレン通りのベルリンラジオ放送局において開かれた。また翌年の11月12日にはこの同じ場所でユダヤ人犠牲者を追悼する会が催された。

当時、ナチズムとの断絶を徹底的に進めていたソ連占領政府および解放者、亡命知識人たちは、人々の中に反ユダヤ主義が残存していることを、戦後も続くユダヤ人墓地などへの攻撃現象の数から読み取っていた。上記した様々なユダヤ人犠牲者の顕彰行為は、反ユダヤ的行為を減少させる効果を期待できるものとして容認、また推進されていたという側面ももっている。

しかしあまりにも多く建設される記念碑に対して、また東ドイツ建国の気配を受けて、国民教育中央委員会副議長エーリヒ・ヴァイネルは二度にわたって「記念碑インフレーション」への警告（1946年12月19日／47年8月26日）を発している。彼いわく「慰霊する人物に十分な敬意を払ったという印象を与えかねないし、また他方で国民の関心を本当に必要な課題からそらしかねないから」勝手にさまざまな記念碑を建設しないようにとのことであった。もちろん純粋に記念碑の数の多さが逆に死者の追悼をないがしろにしているという面もあっただろうが、新たな国民国家形成に向けて政府が記憶の管理を行いたいという思惑が読み取れる発言でもある[44]。

またソ連占領地域にはさまざまな新しい芸術活動をこの新体制下で展開しようとした人々が集まり、活動を開始していた。彼らの専門はもちろん絵画、音楽、建築などさまざまであったが、本稿のテーマである『アンネの日記』との関わりにおいて外すことのできないものが、文学や映画作品だろう。アンネの物語の受容の前に、多くのユダヤ人関連の著作が書かれ、出版され、読まれて

42）ソ連占領時代から60年代の東ドイツにおける記念碑については、オーラフ・グレーラー「ソビエト占領地区や東ドイツにおける記念碑政策と「水晶の夜」との取り組みについて」、ヴェルナー・ベルクマン、ライナー・エルプ他『「負の遺産」との取り組み』岡田浩平訳、三元社、1999年、299-317頁が詳しい。

43）1946年5月27日のことである。

44）この時期、ソ連占領地区にはさまざまな新しい芸術活動をこの新体制の下で展開しようとした人々が多数集まり、活動を開始していた。その活動は記念碑建設だけにとどまらず、数多くの文学や映画作品制作にも及ぶのである。

いたのである。

まず、1946年に出版されたのが、クレーン・ユングの書いた『深みからの叫び』[45]である。これは、その主人公をユダヤ人に設定し、1938年から43年にかけて、ベルリンで次第に生活基盤が奪われていくユダヤ人の様子を時代記録風に小説化したものであった。さまざまな職種や立場のユダヤ人たちの行動や思考といったものが鮮やかに描写され、当時何が起こり、ユダヤ人たちは何を考えて行動していたのかが良く分かる構成となっている。

そして、ユングのものと性格を同じくする作品として、1947年にアルノルト・ツヴァイクが書いた『自由への狭く困難な道・ヒルデ＝ヒュッペルツという女性のナチスの死の国における体験とベルゲンベルゼン強制収容所からの軌跡的な救出の記録』[46]があげられる。一人のユダヤ人女性の数奇な人生に焦点を当て、ナチスの恐ろしさと被害者の苦悩、そして戦後の希望を描いている。

その他、シュテファン・ヘルムーリンは1949年の『連帯の時代』[47]において、ユダヤ人ゲットー蜂起の報告を物語調で行い、またヴィリー・ブレデールは同年出版の『沈黙する村』[48]において、主人公の反ファシスト帰還兵がメクレンブルク州の偶然通りかかった村で知ることになるナチス時代の恐るべき話を描いている。これは、実際にあった村の話の物語化で、終戦間際に親衛隊が捕えた脱走囚人60名の殺害を、とある村の村人たちが手伝い、その事実を村ぐるみで隠蔽していたという事件の告発であった。

ソ連占領当時、文学において、ユダヤ人の迫害と、ホロコーストは格好の題材として進んで用いられ、上記の作品以外にも多数発表されている。これはこの時期の西側占領地域ではあまり見られない現象である。反ナチの思想に希望をもった多くの亡命知識人や収容所帰りのユダヤ人がソ連占領地域で活動していたのは納得のいく話である。

また、小説というジャンルからは少し外れるが、1947年にはヴィクトル・クレンペラーが『LTI. 第三帝国の言語―ある言語学者のメモ―』[49]を、またヨハネス・ベッヒャーが『自由のための教育』[50]という著作物を刊行している。前者は、ある一人のユダヤ人言語学者がユダヤ人として受けた屈辱と人種差別に対して自分の学問的エートスをぶつけ、その専門能力を駆使してナチズム体制の本質をそれ固有の実際言語を手がかりに把握し、暴露しようとしたものであった。これはナチスの言語の残滓を知り、それを批判的に問題視する可能性を提供するものであった。この点が、党派とは無関係に直近の過去と取り組みたいという欲求をソ連占領地域の知識人に呼び起こさせたという点で重要である。また、後者は、もともと戦時中にドイツの共産党の委託によってモスクワで練り上げられた『ファシズムを政治的＝理論的に殲滅する課題のために』の重要部分の抜粋である。ナチイデオロギーの主要な点は人種差別主義、指導者原理、非合理主義、社会ダーヴィニズム、そして最後に戦争が人間の最高形態だとする教義にあるとし、それに対置させて、国民の自己批判の

45）Cleare Jung, *Aus der Tiefe rufe ich*, Berlin Aufbau Verlag, 1946.

46）Arnord Zweig, *Aufzeichnungen der Frau Hilde Hupperts über ihre Erlebnisse im Nazitodesland und ihre wundersame Errettung aus Bergen-Belsen*, Berlin Aufbau Verlag, 1947.

47）Stephan Hermulin, *Die Zeit der Gemeinsamkeit*, Berlin Volk und Wissen Verlag, 1950.

48）Willi Bredel, *Das schweigende Dorf und andere Erzählungen*, Rostock, 1949.

49）Victor Klemperer, *LTI. Notizbuch eines Philologen*, Berlin Verlag der Tribüne, 1947.

50）Johannes R Becher, *Erziehung zur Freiheit Gedanken und Betrachtungen*, Berlin/Leipzig Volk und Wissen Verlag, 1946.

構想と民主主義の原理を説いた内容となっている。この2つの作品はユダヤ人の問題やホロコーストの存在を背景にし、現在の主要テーマへと挑んだ学術的にも高く評価された作品であった。

ホロコーストを題材とした作品は文学だけに留まらず、映画にもその存在を見ることができる。まず有名なものとして、1946年に公開されたヴォルフガング・シュタウテの『殺人者は我らの中にいる』[51]があげられる。主人公は、戦時中、ポーランド人の捕虜射殺を阻止できなかったある医者であり、彼が戦後、その後悔の念に駆られて心を病んでしまう。しかし、射殺を命じた将校は、戦後間も無く成功者となり、過去など消して顧みはしないのである。ニュルンベルク裁判と同時期に公開されることになったこの映画は、それを見るものに「罪と責任」の問題を喚起したのであった。また48年公開の、クルト・メッツィッヒ『影の中の結婚』では、俳優ゴットシャルクとそのユダヤ人である妻との間にあった実際の話が語られている。この話では、ドイツ文学者ディター・シラーが解説するに、次の3つの要素を結びつけることに成功したとのことである。1つは、ナチズムの人種差別政策に対する告発であり、2つ目は、この夫婦の友人や知人に見られる市民的勇気の完全な欠如の表明、そして最後に関係者たちの政治的な愚直さの分析である。この3つの点やニュルンベルク裁判で明らかとなるナチスの罪を通して、この作品はナチスの悪を知り始めた市民の心に長く残ることになった。

1949年10月7日、東ドイツは建国を宣言した。これによって、本格的に東ドイツ流のドイツ国民国家の建設が開始された。国是に相応しい記憶や事柄が国家指導部の下で規定され、それに基づいて選別されていくことになった。そこでは、第一の公的記憶として、ナチス体制による暴力の犠牲と抵抗、そしてソ連軍の勝利の強調に関するものが取り上げられた。これらを通じて、現在の「我々」の反ファシズム、反ナチス精神が賛美されたのである。東ドイツで重要なのは民族の差異ではなく、ナチス、ファシズムに抵抗したかどうかであった。この解釈の中で、レジスタンスでない無抵抗のユダヤ人はことさらに注目されるものではなかった。51年からはソ連主導とした反ユダヤ主義キャンペーンが東欧を席巻していくが、その直前の50年にシュテファン・ヘルムーリンが『孤独の時代』[52]『ボルシェヴィキへの道』[53]という2作品を世に送り出している。彼のテーマは一貫して「ファシズムへの抵抗」である。これはヘルムーリン自身が反ファシズム抵抗闘士として、戦時中をスペイン及びフランスで過ごした経験から直接呼び起こされてくるものであり、同時期の西ドイツにはあまり見ることのできない種類の作品である。またその出版の前年には、彼はアウシュヴィッツを訪問し、そのルポタージュ『アウシュヴィッツは忘れない』を出していることからも、そこでの体験や見聞きした情報がいかに彼を大きく突き動かしたがわかる。同時に彼のこれらの作品は、東ドイツの国是とも一致したため、その評価は政府見解においても高かった。

ii）1951年～53年

この時代は前章でも述べた通り、反ユダヤ主義キャンペーンが盛り上がりを見せた時期であった。

東ドイツのユダヤ人コミュニテイーの4分の1が西側へと逃れるという事実は、ナチズムとは全

51）“Die Mörder sind unter uns”, Regie und Drehbuch, Wolfgang Staute, DDFA-Film, 1946.

52）Stephan Hermulin, *Die Zeit der Einsamkeit*, Volk und Welt Verlag,1950.

53）Stephan Hermulin, *Im Weg der Bolschewiki*, Volk und Welt Verlag,1950.

く関係のない、ファシズムの克服された国「東ドイツ」という体面を大きく傷つけることとなった。

しかし、東ヨーロッパの他の国々とは異なり、東ドイツではスターリンの死後すぐに、このキャンペーン中に迫害されたり、解任されたりした人々の名誉回復が図られ、元の地位への再登用も行われた。他の東欧諸国と東ドイツとの違いは、自らも加わった反ユダヤ主義キャンペーンではあったが、やはり、ホロコーストを過去にもつ国として、また、同じファシズムの犠牲者、闘士としてのユダヤ人という意識が東ドイツ人の内面にあったからと推測できる。マリオ・ケスラーの『ドイツ社会主義統一党とユダヤ人　抑圧と寛容』[54] によると「1953 年以降、ユダヤ人は社会の中に仲間として加わることを容認され、反ユダヤ主義には道徳上の注意が払われた、そして相応しくない発言は処罰の対象とされた」とのことである。また「1953 年に反ユダヤ主義キャンペーンが終わった後、次第に文学、芸術、そしてマスメディアを通してナチスの過去への議論、批判的取り組みが強まった」のであり、「ユダヤ人作家、そして外国人作家の作品も部分的に高い発行部数において出版され、反ユダヤ色調から自由にカフカの作品なども読まれた」と述べている。このことからも分かる通り、反ユダヤ主義キャンペーンの影響は東ドイツでは長引かず、むしろその後、ユダヤ人たちの記憶の呼び起こしが展開されていくことになる。

iii）1953 年以降から 70 年まで

反ユダヤ主義キャンペーンのあと、東ドイツにおいては、その国家の正当性である「反ファシズム」精神に基づくユダヤ人の取り扱いが再び開かれたものとなった。ソ連占領期や建国初期にあっては、そのユダヤの民族性に基づく特別な配慮はされていなかったが、少しずつその個別の民族性にも触れる形でホロコーストが語られるようになった。公的な教科書、資料集においてユダヤ人迫害への言及が増加していくのもその顕著な例である。1956 年に出版された初めて第二次世界大戦を扱った東ドイツの歴史教科書『Geschichtsunterricht 8 Schuljahr』[55] においても既にナチスによるユダヤ人迫害、強制労働への従事、そしてドイツ人による虐殺の記述が存在し、また、どのようにファシズムとレジスタンス抵抗闘士が戦ったのかについても詳細な説明が見られる。もっとも教科書において、どの程度の記述があれば十分だとか、不十分だといった判断を下すことは難しい。しかし、同時期の西ドイツのものと比べると、その記述量の多さと、情報の質にも注目に値するものがある。

また、50 年代初期に建設構想が練られていた各強制収容所の追悼の場も完成し、東ドイツでは、成人になる儀式の一環として国民にこれら収容所の訪問を義務化していった。1958 年 9 月 14 日にブーヘンヴァルト強制収容所記念碑が、翌 59 年 9 月 12 日にラーフェンスブリュック強制収容所記念碑が、そして 61 年 4 月 23 日にはザクセンハウゼン強制収容所記念碑が次々と除幕された。このような施設を記念施設として開設し、人々の訪問を促進するといった現象は、同時期の西ドイツでは全くといっていいほど行われておらず、考えられもしないことであった。これらは、フリッツ・

54）Mario Kessler, “Zwischen Repression und Toleranz. Die SPD-Politik und Juden (1949 bis 1967)”, Jürgen Kocka (Hg.), *Historische DDR-Forschung Aufsätze und Studien*, Berlin Akademie Verlag, 1993.

55）*Geschichtsunterricht 8 Schuljahr*, Berlin Volk und Wissen Verlag, 1956, S.126–180.

クレーマー[56]やヴァルデマー・グリジメック[57]などの東ドイツにおける高明な芸術家によって制作され、その特徴が収容所の現物保存と遺品展示だけでなく、外部にも記念碑彫刻を配置した公園を造るなど、ソ連式の一大「メモリアルパーク」となっていることである。そのフォルムは“巨大”で且つ、ヘーゲル的歴史観に基づく“勝利し続け、進歩していく共産主義”が表現されている。収容所から解放された（自ら解放した）筋肉隆々とした若者が、翻る大きな旗を掲げ、または拳を振り上げ、今、ナチスへの勝利を高々と謳い、未来に向けて大きく先進するその逞しい姿には、将来に対する一片の不安も感じさせるものがない[58]。しかしこれらの場所には、圧倒的多数の、無残にも殺されていった何百万という数のユダヤ人やマイノリティ達の面影を見出し、追悼するといった余地を大々的に見ることはできなかった。

しかし別の場所において、この時期に顕彰対象をユダヤ人だけに絞った記念碑が出現している。例えば1960年11月9日には、ベルリンにおいて「「11月ポグロム」で殺害された5万5千人のベルリンユダヤ人のための記念碑」が、66年11月にはライプツィッヒのゴットシェーン通りに「殺害された1万4千人のユダヤ系市民を偲ぶための記念碑」が完成している。そしてまたドレスデンにはホロコーストで亡くなった600万人のユダヤ人犠牲者の為の記念碑が建設されたのであった。その他ではこの時期に、「水晶の夜」記念が国家事業へと格上げされたことや、ユダヤ人図書館の開館、また、歴史博物館においてナチス時代にユダヤ人の皮膚を使って作られた人形の展示やユダヤ人墓地43箇所の文化財保護決定がなされるなど、確実にナチ期やホロコーストにおける「ユダヤ民族」の存在が国家レベルにおいても認知されたのである。文学の分野においては、1957年に『アンネの日記』が、そして63年にはフランク・バイヤーの大ベストセラー『裸で狼の中で』など、ユダヤ人を主人公としたり、ホロコーストと関わりをもったりする作品が登場し、人々に好意を持って受け入れられていくのである。

このように反ユダヤ主義キャンペーン終了以降、国民国家形成が軌道にのり始めた後の東ドイツでは、建国当初の、「レジスタンス運動をしたか、もしくはしなかったか」による分類に加え、明らかに「ユダヤ人」というカテゴリーでの記憶の表象も公的な分野において行われるようになったことが伺える。ただ、この時期の東ドイツにおける「ユダヤ人」は、「ナチスに勝利した我々」とナチスの悪を強調する要素としての「犠牲者ユダヤ人たち」という位置付けであり、けして自らの罪として彼らを追悼したわけではなかったこともまた明らかである。そして、実際に迫害されたユダヤ人の中で具体的な名前と顔の一致をもって多くの人々に受け入れられたのは、西ドイツと同様に、アンネの物語だけであったことは強調しておかねばならない。そして、この物語は、東ドイツにあっては今後ますます発展していくであろう「社会主義の思想」とも合致する解釈が可能であった。特にアメリカナイズされる過程で「人間に対する信頼と希望のメッセージを伝える物語」とさ

56）フリッツ・クレーマー（1906-1993）：彫刻家・版画家。1950年に東ドイツへ移住。ブーヘンヴァルト強制収容所記念碑、マウントハウゼン強制収容所記念碑、ラーベンスブリュック強制収容所記念碑などを建設。

57）ヴァルデマー・グリジメック（1918-1957）：彫刻家、ザクセンハウゼン強制収容所記念施設計画。

58）未来志向の、社会進歩のために反動と戦い、勝利していく東ドイツの建国神話については、高橋秀寿「社会主義国家の建国神話―『戦艦ポチョムキン』から『グッバイ、レーニン！』まで」『東欧の20世紀』人文書院、2006年が詳しい。ちなみにこの記念碑はブーヘンヴァルト強制収容所記念碑を念頭においている。

れたことの意味は大きい。「分け与えることで、貧しくなった人は、まだ誰もいません。」や「なんと素晴らしいことでしょう。世界を良くすることを始めるのに、誰も一瞬ですら待つ必要はありません。」そして「希望のあるところに人生もある。希望が新しい勇気をもたらし、再び強い気持ちにしてくれる。」といった、『アンネの日記』に出てくる彼女の言葉は、先ほど述べた強制収容所記念碑の銅像と同様に、まさに社会主義と、建国から間もない東ドイツの輝かしい未来を担保してくれるかのようである。

そして同時に、東西冷戦の激化する世界情勢にあって、東ドイツでは、こんな“可哀想なアンネ”の境遇を生み出した「ナチスや帝国主義者たち」=「西側諸国（西ドイツ）」と捉え、「彼らの悪行」を、アンネを使って強調、宣伝することで、自らの反ナチスの立場、正当性をアピールすることもできた。オットー・フランクは度々「あまり政治的なことにアンネやマルゴットを使われたくない」と話していたとのことであるが、アンネはこの政治的な目的という意味合いも含めて当局のお墨付きを得たのであった。

このような文脈の中に『アンネの日記』やアンネ自身を位置付けて考えると、その理解や受容、そして社会的な機能の一端を読み解くことができよう。

ま と め

本稿では、高橋秀寿の西ドイツにおける『アンネの日記』の受容の分析研究から発想を得て、東ドイツにおけるアンネの理解と受容の経緯と社会的背景の一端を考察した。東ドイツにおいても、当初、この物語は、レジスタンスでないユダヤ人少女の話として、受け入れられる余地はなかった。しかし、「アメリカナイズ」され「普遍化」されたこの物語は、東ドイツ社会の文脈で理解され、公的にも私的にも受け入れられ、機能していくことになった。

第一章では『アンネの日記』のアメリカや西ドイツでの出版過程、そして受容とその理由について高橋の論考を元に確認した。「“アメリカナイズ”されたアンネとその物語の解釈や記憶」が、これまでこの物語の受け入れの余地のなかったアメリカや西ドイツの状況を変えることになった。

第二章では、東ドイツにおける『アンネの日記』の出版過程と社会的背景を概観した。そこでは、演劇としてアメリカからやってきたこの物語が人気を博し、当局からも許可を得、そして紙の割り当ても他に優先して出版される様子が見てとれた。

第三章では、東ドイツにおけるアンネ・フランクの受容の素地について考察した。占領期から70年代にかけて、そもそも西ドイツよりも多くの他のホロコーストやユダヤ人に関する文化的生産物（文学や記念碑）が存在し、受け入れられていたことは、アンネの物語の受容に大きな役割を果たしていたといえる。特に書籍は印刷物の許可や紙の供給事情、そしてその後の流通を考えると、反ナチスを国是とするこの国におけるこの分野（ホロコーストやユダヤ人）への理解は大きかったことが分かる。東ドイツにおいては、これらの素地の文脈にアンネの物語を位置付けて考えることが必要である。そして、アンネの物語はその「普遍性」と共に東ドイツ特有の国是と東西対立の中で「価値」が見出され、機能することになる。

このように、東ドイツにおけるアンネと『アンネの日記』の理解と受容は西ドイツのそれとは異なるいくつかの点を持って行われた。同じ作品ではあるが、その理解と受容が時代や地域によって

当初から極めて「政治的」なものであることは興味深い。そして、東ドイツにおける受容のきっかけが、「敵対」関係にあったアメリカにおけるこの物語の「普遍化」であったことも非常に興味深い。ナチス後の「人類に共通するもの」と、極めて「イデオロギー的なもの」の中で、同じ物語が（アンネを迫害したドイツの）国民国家の装置の一部として社会的に機能していく、そんな壮大な「物語」になった、いや、なってしまったとは、作者のアンネが一番驚いているに違いない。

（本学国際関係学部授業担当講師）